第Ⅰ分科会

座　　長　古河良啓
副 座 長　岡田文弘
問題提起　伊藤瑞康
運　　営　内藤善之・中村宣悠・山内寛久
記　　録　庵谷行遠
参 加 者　十五名

一、運営について

樋口邦史氏による特別講演と赤堀正明所長による基調講演を受けて、教学／教化学のイノベーションについて討議した。

座長による説明（挨拶・Zoom操作の確認・分科会趣旨説明・教化の読み方）の後、伊藤瑞康師による問題提起を行った。

その後、参加者全員で自己紹介（管区・氏名・第一分科会を選んだ目的）をして討議に入った。討議は前半と後半に分けて行った。前半では、アンケート調査結果の報告と設問ごとの簡易的な分析を行った。後半では、前半の内容を踏まえて討議を行った。

二、問題提起

① 宗務総長からの諮問

宗務総長より、現宗研に対して「教学と教化学の一体化」について検討を要する旨の諮問があった。本分科会は、その諮問に基づいて開催されている。

② 「教学」と「教化学」の定義

本分科会における「教学」と「教化学」の定義を確認共有した。

【教学】とは、古典教学、伝統教学、口伝法門、現場での教学などを指す。教師が、一般的に漠然と「現場では必要ない・難しすぎて使えない」と思念するような教理・体系的学問をいう。

【教化学】とは、布教方法、化儀次第、時代に応じた教導の手法の研究などを指す。教化は、「如来使・法師」の本分である布教をいう。教化学は、布教を行うための学識・教養とする。

※本分科会においては、「教化学」の読み方を「きょうけがく」とする。「きょうけ」は、衆生を仏道へと教え導くことである。

③ 第一分科会の目的

イノベーションとは、価値の創造である。本分科会の目的は、教学および教化学における、価値の創造について検討することである。

そもそも、教学と教化学との乖離の問題は根底に次のような意識がある。

Ⅰ「教学は必要ない」と公言する人が多々いる。日蓮聖人の教えと全く違う教えが公の場で説かれている。

Ⅱ日蓮宗の教育に問題がある。さらに、僧侶の能力・意欲にも問題がある。それにより、教学は必要ないという思考がある。

これらの問題を解決するために、教学と教化学のイノベーションが要求される。

教化／布教の根底には教学が必須であることの前提に立ち、教化の現場のニーズに応える教学を樹立する。すなわち、「教学」と「教化／布教」を折り合わせるのである。教化と結びついた現場で「使える」教学を構築する必要がある。

伝統教学の現代的解釈・再構築を試み、布教現場の要望に応えることが、本分科会の存在意義である。

そこで、教学と教化学という言葉の定義について検討し、その上で「布教現場のニーズに応える教学・教化学」の樹立を目指す。「伝統教学と教化現場は関係ない」という意識を転変させるために何が必要かを考える。それが本会議のテーマであるイノベーションに他ならないであろう。

三、分科会討議

① 事前アンケート

事前アンケートでは五個の質問を設定した。これにより布教現場の実態や、現実的・実践に基づく問題点が把握できるものと思われる。

○事前アンケートの設問と回答（表記統一のため、文意を損なわない範囲で一部修正した）

設問一：現場で「教学」を知らなくて困ったことはありますか。／現場で「教学」が必要であると感じたことはありますか。

◎回答の傾向は、必要であるという意見がほとんどであり、必要とする場面も多岐にわたった。

・通夜説教等で「教学」が必要だと感じる。日蓮宗の葬儀は何のために何をしているかを、誰に対しても伝わるように説明しなければならないからである。

・現代社会の諸問題に対して法話をするときに「日蓮聖人のとらえ方」ができない時に「教学」が必要であると感じる。

・仏壇を祀る時に「教学」が必要であると感じる。

・檀信徒に質問をされた時に、すぐに答えられなかったことがあり、その時に現場での「教学」の必要性を感じた。

・葬儀法要・寺の年間行事等は布教活動の現場である。あらゆる場面で挨拶・法話を求められ、「教学」が必要であると感じる。

・他宗派との違いを子どもに聞かれた時に、どう説明するか戸惑ったことがある。「教学」の理解が深ければ、子どもにもより分かりやすく話すことが出来たのかもしれないと思い、不勉強を感じた。

・檀信徒の不安や悩み、死別の苦しみ等に向き合う際に、法華経や日蓮聖人の教えに照らし合わせる必要があると感じる。

・「上行所伝の南無妙法蓮華経とは、どういう意味なのか?」と青年僧の頃に、檀信徒から尋ねられ、咄嗟に返答出来ず、後日回答した事がある。日々の研鑽が必要だと痛感した事がある。

・中央教研や各地域の宗務所レベルの会議でもいえることだが、僧侶同士での宗門に対する今後の展望などの意見交換の時に、ある程度の「教学」を学んでいなければ同じ視点で考えることが難しい気がする。
・創価学会や顕正会などとの違いを問われ、説明が上手く伝わらなかったことがある。自分は「教学」の理解が不十分であり、勉強の必要性があると感じた。
・無神論者に対して「教学」が必要であると思ったことはある。
・「教学」を知らなくて「困る」とは感じない。しかし檀信徒との会話、布教の時に、お釈迦様・日蓮聖人の代理として「自分は誤った解釈、物言いをしてないか」を確認するために、「教学」を学び直すことはある。
・現場では実際に「教学」を檀信徒に伝える機会は少ないと感じる。

※　当設問からは、実体験に即し、伝える相手がいてはじめて「教学」の必要性を感じている実態がわかる。

設問二：「教学」を大学で学び得ましたか。／卒業後は学ぶ機会はありますか。

◎回答は、大学で学ぶ場合が大多数であるが、勉強不足を感じている状況もみられた。さらに、大学卒業後の学びの必要性についての具体的な意見が確認できた。

・身延山大学出身である。学ぶ機会はある。
・立正大学にて「教学」の授業を履修した。
・宗学基礎、宗学概論などで学んだ。

・立正大学宗学科にて学んだ。寺庭婦人研修会等で学ぶ機会がある。
・大学で学び、機会があると勧学院の講座等を聴講している。
・大学で学んだ。自分の勉強不足を現場で感じ、大学の教科書を見直したり教区の教学研修会議で学び直したりした。
・仏教学科だったので「教学」よりも仏教学の比率が高かった。中尾堯先生のオンライン講座を毎月受けている。
・宗務院主催、布教実践講座で機会がある。
・卒業後は自ら学ぶ意思を高めなければ、なかなか機会はないかもしれない。
・卒業後は勧学院講座や、教学大会・日本印度学仏教学会・日本宗教学会の聴講や各種学術雑誌、教学系の諸先生の著書を通して学んでいる。
・教区の夏期講習会があり、「教学」を学ぶ機会がある。
・宗門の学校は出ていない。宗門内の縁ある僧侶の勉強会等で学ぶ機会はある。
・大学で「教学」の授業を履修したが、不真面目であったので学び得ていない。
・自分の怠惰のせいもあり、大学では修めきることはできなかった。普段自坊で勉強するのは難しいので、布教研修所に入って勉強する。

設問三：「教化学」についてどのようなイメージをお持ちですか。学んだことはありますか。

◎設問三の回答は、「教化学」のイメージについて不明確な意見がある一方、ある程度共通したイメージを持っている回答もあった。

・いまいちよくわかっていない部分がある。
・「教化学」というカテゴリーで意識したことがない。学んだことがあるのかもしれないが、具体的にはわからない。
・定義通り、「教学の現代的意義の解明」というイメージである。しかし具体的な類例をあげると定義があやふやになるイメージもある。
・檀信徒を教化していく際の、理論的かつ実践的方法や考え方をイメージしている。
・「教化学」のイメージは、教学をどう現実の布教に繋げるかである。科学・医療・文化・現代人の人生観・死生観などと教学を結びつけるものである。
・布教活動や檀信徒に向き合う際の、行動原理や理念・理想の追求というイメージをもっている。また、教学・「教化学」という分野に分かれるのではなく、教学の中に教化が含まれていて、より現場に即した学問が「教化学」だと思っている。
・「教化学」は立正大学で学んだ。実際に檀信徒を教化する手法についての学問というイメージがある。
・教学を布教の現場にてどう伝え、活かしていくかというイメージである。
・仏教の教えを説いて人々を信仰の道に入らせる為の、内容や方法を学ぶ学問というイメージである。
・教学の具体化、社会化。教師各々が自らの人生の曲面で、教学が自分のためにどのように活かされているのかを内省し、それを自分の言葉で伝えることである。
・大学で学んだ。
・大学で山田恵大先生の「教化学」を受講した。
・学んだことはない。

・「教化学」という分野では深く学んだ事はない。

設問四：こんな「教学」があればいい、というものはありますか。

◎当設問の回答は、実践的な内容や学術的な内容のものなど多岐にわたる意見が確認できた。

・檀信徒、未信徒にも伝わりやすい「教学」があれば良い。
・お釈迦様・法華経・日蓮聖人・南無妙法蓮華経のお題目の関係についての「教学」。
・比較宗教学のように、様々な宗教や宗派の「教学」を比較してもらうと、日蓮聖人の考えがよく理解できるし日蓮宗の教えが際立つ。
・個人的には、若年層に伝えられるように「教学」を学んでいきたいと思う。しかし「教学」に関しては個々人の勉強が重要だと感じる。特にあればよいと思う「教学」は現状ない。
・時代や状況を問わない普遍的な「教学」が必要と思う。また、「法華経を含む大乗経典は釈尊の所説ではない」とする大乗非仏説や、「『立正安国論』は時代や状況が異なるから現代社会には必要ない」という主張に対する明瞭かつ「教学」的な答えを周知する必要があると思う。
・大学で習った基礎を忘れずに復習し続けなければならないと思う。しかし、日々の法務に追われて出来ない事が多い。反省も含めつつ「こんな教学があれば」を探すことが出来ればと思う。
・日蓮辞典を参照する際に、天台学に対する知識がないと、理解が難しい項目が多々あると感じる。日蓮聖人も学んだ天台学をもっと時間をかけて学んだら良いと考える。

・戒名（法号）の授与について、亡くなった際に授与するものと考えられているが、逆修は例外と位置づけられていると思う。しかしそれは「教学」的に違うということを理論的に教化（説明）してほしい。
・あまり考えたことはない。
・特にない。

設問五：具体的に、こんな教えを「教学」で基礎づけて欲しい、というような教えはありますか。（例：成仏・中陰・年回忌・死後の世界・お題目の安心など）

◎設問五では、日常に深く関係している仏事に即した回答を得た。普段の法務をただこなすだけではなく、そこに意味や価値を見出し、責任感を持つために努めなければならないという意識が伝わってきた。なお、生死観・成仏論・日蓮宗における葬儀については、鈴木隆泰特別研究員より分科会にてコメントを頂いた。

・死後の世界。葬儀。
・輪廻や死生観。
・死後の世界・成仏・法事の意味。
・成仏・お題目の意味・死後の世界。地域性もあるので、都市部では必要ないかもしれない。
・これからを担う若年層の檀信徒に対し、法事・葬儀の場で日蓮宗の供養を伝えられることがより必要とされるように感じている。その場合、例に挙げられた「教学」が必要だと思う。
・お布施の意義・葬儀の意義・塔婆の意義・法号の意義など。お布施として金品を預かる以上、そこにどの様な意

味があるのか檀信徒等に説明できる様にする必要があると思う。

・中陰や回忌などを「教学」と結びつけて話ができれば、檀信徒も日蓮宗に親しみをもたれるのではないかと思う。

・葬儀の道具「提灯・天蓋・袖守りなど」に書く経文の意味などを聞かれたり、設問の例に記載されている事を聞かれたりする事が多い。

・仏壇の祀り方において、曼荼羅と違うことが普通だと思う。実践面で「このように祀っている」というものはあるが、その際の理論的解説はあまり聞いたことがない。なぜ、脇侍に大黒天や鬼子母尊神・観音菩薩などを祀るのか（四菩薩ではない）。その理論的説明が欲しい。

・『日蓮宗仏事故事便覧』（青山社）などを参考にして答えている。伝道部のリーフレットの様な冊子で、現宗研にて基礎づけられた内容のものが発行されていたら、青年僧にも役立つかもしれない。

・「今、末法に入りぬれば余経も法華経もせんなし。但南無妙法蓮華経なるべし。」『上野殿御返事』。「法華経もせんなし」とはどの様に解釈するのか。

・一念信解、初随喜、名字即成などの成仏論を分かりやすくまとめてほしい。

以上、前半のアンケート結果を踏まえて後半で討議を行った。

② 教学／教化学のイノベーションについての討議

・イノベーションとは、無から有ではない。有から有を組み直し、創造することである。昔から受け継がれてきたことを作り直すことである。本質的な部分は先師先哲のリニューアル（再生）がヒントになる。

・教学はストーリーであり物語である。教化学はナラティブ・ナレーションであり、語り手すなわち、僧侶が主体

となる。聞き手は檀信徒である。

・法華経・御遺文を学ぶことが教学である。それをそのまま伝えても檀信徒に伝わるか疑問がある。自分というフィルターを通して分かりやすく伝えることが教化学である。

③ 布教現場での課題・問題意識

・自分の御遺文の読み方が正しいか疑問がある。自分の教学解釈に自信がもてない。教学を現場でどう活かせばよいのか分からない。

・本尊の多様な勧請形式をどう理解すればよいか分からない。

・教学の知識が乏しい。話をする時の教学の知識を増やしたい。正しく御遺文を読めれば正しく導ける。

・檀信徒からの問いや悩みに対して、御遺文を用いて応えたい。法話等の場において、一行・一文・一句でも御遺文や『法華経』を用いることが大切である。但し、話題に対して、無理矢理こじつけていないか、都合の良い部分を切り取って利用していないか、原典における本来の文脈の意味を損なっていないか、常に注意が必要である。

・比較的に高齢者は、無条件に先祖や仏をありがたく感じ、仏教を肯定的に捉えていて、教学を必要としていない事例がある。一方、若い世代はその感覚が乏しく、教学に裏づけされた教化学が必要である。

・病（心・身）に苦しんでいる方（元気がない方）への教化について宗門の不備を感じる。元気な方へは、教学の勉強会や普段の教化が有用である。しかし、重篤な病に苦しみ、抜き差しならない状態の方への布教は、現在の教化学は有効ではない。傾聴の会等に個別に入会し、研修を受けたりするが、日蓮宗教師（宗教者）でなくてもよい。生老病死に寄り添うはずの仏教は、現在の教化学の枠組みにおいては有用でない。仏教色のある手法（教化学）での対応が求められる。

④ **布教現場からの要望**

・網羅的に学習資源の充実を図ってもらいたい。個々の檀信徒の悩みに応じて、ニーズに対してアプローチできて、かつ教学的裏づけがある資料の提供が欲しい。（こういう悩みの時は、このお経（御遺文）の一節が有用である等。）

・悩みごとにそった遺文集（逆引き遺文集）があるとよい。他宗にはある。

・経典・経疏の大事な文言を引ける本・検索エンジンが欲しい。

・実践の法務において、それぞれの法要儀式・儀礼・仏具等に教学的裏づけが欲しい。

・鬼子母尊神・大黒天をどう理解するか、檀信徒に説明するために教学的に分かりやすい解説が欲しい。

・日蓮聖人伝の史実としての行動と共に、史実ではないかもしれないが各地に伝わる日蓮宗・日蓮教団にまつわる伝承を学びたい。信仰の補完としての伝承（七面信仰や鬼子母神信仰などを含む）も学びたい。

・多様性のある地域固有の慣習儀礼について、言い伝えや理由が分からないので教学的意義を踏まえて教えて欲しい。例えば、地域によっては葬儀に不動・愛染の種字を持っていく習慣がある。

・即身成仏なのになぜ回忌法要が必要なのか教学的な説明が欲しい。

⑤ **問題解決への提言**

・悩み事ごとに検索ができるようにできたらどうか。日蓮宗のホームページポータルサイト内に設定してはどうか。検索結果によって、口コミが読めるようにする。○○寺へ相談に行くと人間関係が祈祷で良くなったなど。

・食べログのように、寺院も検索できるようにしてはどうか。地域や寺院の特徴（ご首題・修法・法話・教学・ヨガ等）によって条件設定をして絞り込み検索ができるとよい。

・法務の実践場面において、教学と教化学の折り合いの付け方に工夫が必要である。その際に、演繹法と帰納法が有用である。教学は演繹法に配当され、教化学は帰納法に配当される。帰納法は具体的な事例である。一人一人の檀信徒の悩みは千差万別である。その問いにそれぞれ対応するために、個々の事例をあげ、マニュアル化する。批判や訂正があれば、改善してさらに深めることができる。弁証法でアウフヘーベンしていく。この作業を継続し、積み重ねていくことで大きくまとめていく。

・各寺院の法務実践の事例のノウハウを蓄積できるようにしてはどうか。各寺院での応対の事例をデータ化し、教師専用サイトで共有できるようにする。教化学の情報の共有化を図るために、日蓮宗の知恵袋を作成してはどうか。（葬儀に関しては、『お題目でおくるお葬式』（日蓮宗新聞社）が有用である等。）

・自分を含む、みんなが納得できる教学的知識や答えが欲しい。教学の専門家による一問一答等の事例集を作成してはどうか。僧侶に分かりやすく、かつ一般的に伝わりやすい内容の布教資料を用いて、学びながら実践していく。

・日蓮宗各寺院のチラシ・パンフレットが日蓮宗のサイト内から閲覧できるようにしてはどうか。

・インターネットで法門や教学を検索すると大抵の場合、創価学会の関係者と思われるコメントが上位にヒットする。教学の理解を促すという観点からいえば、回答の難易度については高いレベルを求めずに、低いレベルのものでもアクセスしやすい方がよいであろう。そこで、精密で高尚な教学理論ではなく、一般的に読みやすいレベルの回答をネット上に公開することで、ネット社会に対して参入してはどうか。

・神社（神道）には参拝儀礼（二礼二拍手一礼、等）の共通認識が一般的に根づいている。一方、仏教寺院には、それがないのではないか。寺院参拝の指針を定めてはどうか。

四、まとめ

「教学と教化学の一体化」について、宗務総長からの諮問に基づいて第一分科会は開催された。

本分科会は教学／教化学のイノベーションと題して、術語の概念規定を含めて、布教現場での要望・問題点・課題と、その解決への提言について討議した。

アンケート調査では、現場の僧侶が抱える課題・問題意識が具体的に浮き彫りになり、現状が把握できた。

参加者は、教学と教化学に関して日頃から布教現場において、高い問題意識をもっている方々であり、分科会にも積極的にご意見・提言を頂いた。

また、鈴木隆泰特別研究員からは、特に要望が多かった生死観・成仏論・葬儀についてコメントを頂いた。

教学と教化学という言葉の定義については、修学の機会の有無に左右され、各個人によって大きく異なるであろうと事前に予測していた。しかし、当日の討議では、参加者は概ね共通した認識をもっていた。教学と教化学をもっと学びたいという意見もあった。

布教現場のニーズに応える教学・教化学の樹立を目指していくために、それに必要なものについて議論するという第一分科会の当初の目的は、達成されたものと思われる。

第一分科会における要望・提言は重要な内容を含んでいる。現宗研として、これらの検討課題に応えるべく、解決に向けて取り組んでいきたい。

第Ⅱ分科会

座　長　河﨑俊宏
問題提起　加藤彰晃
運　営　藤﨑善隆・菊岡妙光・本間文裕・都泰雄・原一彰
記　録　髙野光拡
参加者　十四名

一、運営について

〈インフォメーション〉

オンラインと会議室のハイブリッドであることを踏まえ、ミュート設定、挙手やチャット、リアクションボタン等、発言の際のルール、また記録のために録画をすることを確認した。

〈アイスブレイキング〉

座長挨拶の後、管区・名前・宗門教育機関での指導者経験の有無・現在弟子がいるか否かについて、参加者がそれぞれ短く自己紹介を行った。参加者二十三名の内、指導者経験がある方は十名、弟子がいる方は五名であった。

二、問題提起

日蓮宗宗憲について述べられ、現行の法器養成プログラムについて（**図1、図2参照**）概観したのち、信行道場ま

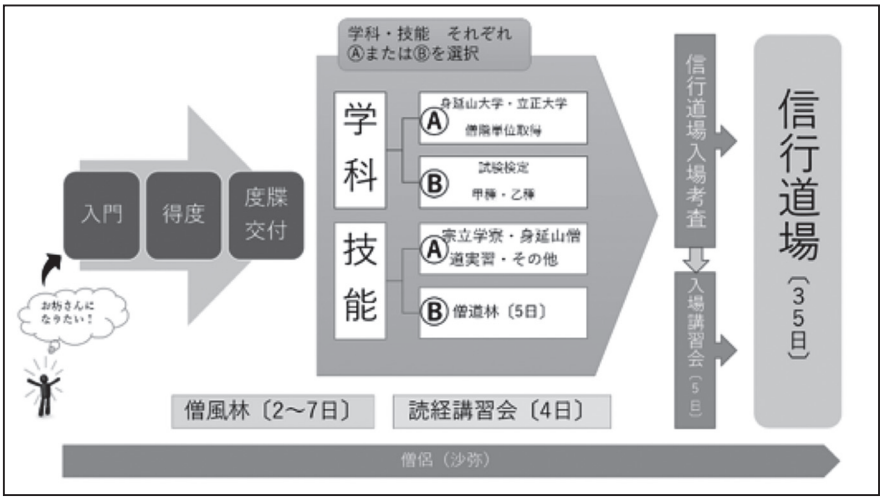


図１：信行道場までの法器養成プログラム概観

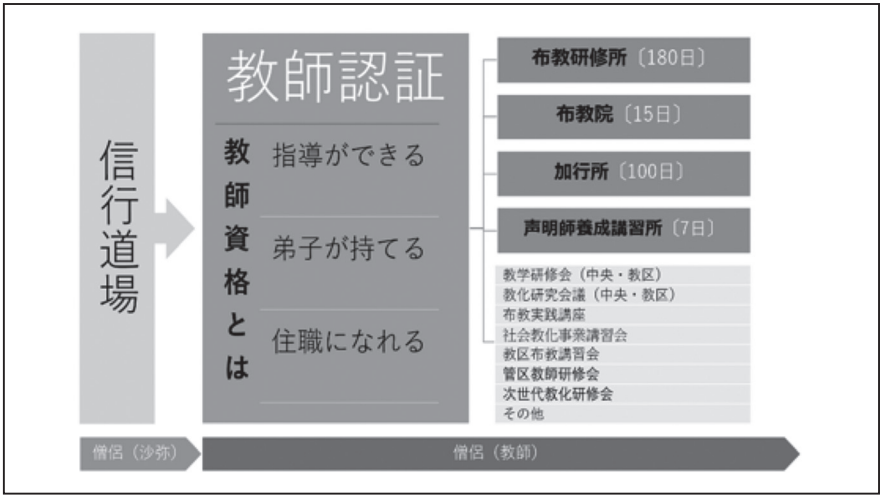


図２：信行道場以後の法器養成プログラム概観

での問題点として、

① 全体として技能（読経・声明・所作など）を修得させることに偏っているのではないか。

② 学科は試験検定を含め、ほぼ大学（身延山・立正）に一任され、宗門としてのチェックがなされていないのではないか。

③ 信仰することの喜び、感動などを伝える場面がほとんどないのではないか。

④ 教義や内容（心）を伝えることが二の次になっているのではないか。

⑤ 師匠の役割が不明確ではないか。

以上の五点が挙げられた。

また、教師資格を得て以降の問題点として「その後の行学については自由裁量であり、教師として資質向上を図る義務もなく、放置状態となっている」ことが指摘された。宗門教育制度に関しては「現状把握や分析ができていない」「改革の必要性を各々が感じていない・動機がない」という理由から、このままであればイノベーションの実現は難しいのではないかと述べられ、「現状分析の必要性」と「各教師が、今のまま何もしなければ衰退していくという意識を持つことの重要性」が強調された。

最後に宗門教育の未来図として、まず「僧侶とは何か」を考え、「仏子となる」、「常不軽菩薩となる」という視点を目標と定め、その教師像に向かってＰＤＣＡサイクルを取り入れた運営のシステムが必要であるという提案がなされた。

＊ＰＤＣＡサイクルとは：Plan（計画）、Do（実行）、Check（測定・評価）、Action（対策・改善）の仮説・検証型プロセスを循環させ、マネジメントの品質を高めようという概念。

三、分科会討議

〈問題提起を受けた意見・感想〉

問題提起を受け、参加者より以下のような意見・感想が述べられた。

『師弟関係について』

・読経や所作の練習、掃除や法要参加などを通じて、信仰や技術について師が弟子に伝えていくことがしっかりできていれば、新たな教育機関を開設していく必要もないのでは。

・背中を見せてはいても、親子では指導に限界がある。他人の釜の飯を食べるように勧める。第二の師匠を肉親の外に求めていくのが良いのでは。

『僧道林や信行道場について』

・僧道林は信行道場で自我偈も読めない人のために新設された制度。その教育がある分、技術の面でも信仰の面でも、新設以前よりは全体のレベルは上がっているのではないか。

・現行制度の運用の見直しをすべきではないか。信行道場に入るまでのハードルが低すぎる。読経や教学など、もっと勉強してから信行道場に入るべき。

・信行道場が読経や声明所作などの技能習得に偏っているとして、「それでも技能は大事」と考える。現状を維持していくにしても、減らしていくということは考えない方がいい。

・道場生の中に経験やレベルの差がある。学寮などでの体験がない者に対しては、僧道林よりも長く、僧道実習よりは短い教育があるとよいのでは。

・仏教を指針にしてどう生きていくかという意識向上が必要。

『更新制度、生涯教育について』

・現代は僧侶も人間性が問われる。たくさんの人との交流を通して人格形成を促していくべき。各本山での山務などを宗門が義務化していくこともあっていいのでは。

・運転免許の更新制度のように、定期的に僧侶としての能力を振り返る機会が必要。

・身延山や宗務院で講習を受けると時間も費用もかかる。オンライン等を駆使した教育、講習や資格試験等も充実させていくことで解決できるかも。

・僧階を上げるとき、書類だけでなく研修などをするような仕組みも検討すべき。

・心理学やカウンセリングの勉強、心の資質に関する教育も必要。

・「教師認証」と「住職になれること」を分けて考えるべきではないか。住職になるために更なる研鑽が必要となる仕組みは作れないか。

『裾野を広げるための制度改革について』

・女性や寺庭婦人がもっと僧侶になりやすくなるような、裾野を広げるための制度改革を。

・これからお寺だけでは食べていけない、二刀流のような人も増えてくる。僧道実習でも「一ヶ月」を繰り返すなどして教師資格がとれるようなシステム作りが必要。

〈教育計画策定・運営システム（仮称）の提案〉

ここで問題提起者より、現状を踏まえた改革案が提示された。例えば布教研修所の場合、「教育研修委員会」がカリキュラムを策定し大まかな全体像を示してはいるが、細かな指導内容や講師選定などは現場任せになっている。過

年度の内容からの繋がりはほとんどなく、教育の専門でもない現場の教師が、その年ごと手探りでシステムを作り上げなければならないといった問題がある。

これに対し、「カリキュラム策定プロジェクト（仮称）」を立ち上げることで教育計画のＰＤＣＡサイクルを回せるのではないか。具体的には「カリキュラム策定プロジェクト（仮称）」が計画を立て（Plan）、「各教育機関」の教職員が実行し（Do）、「カリキュラム策定プロジェクト（仮称）」と「教育研修委員会」が評価・分析し（Check）、「カリキュラム策定プロジェクト（仮称）」が次の計画や行動につなげていく（Action）という提案であった。（**図３参照**）

〈宗門教育についての未来図：行学林（仮称）構想について〉

続いて問題提起者より、三十年前に総長諮問を受けて構想された計画について紹介された（**図４、図５参照**）。この行学林（仮称）構想を参考にし、「令和版の行学林（仮称）構想」を考えていけたらとの提案がなされた。

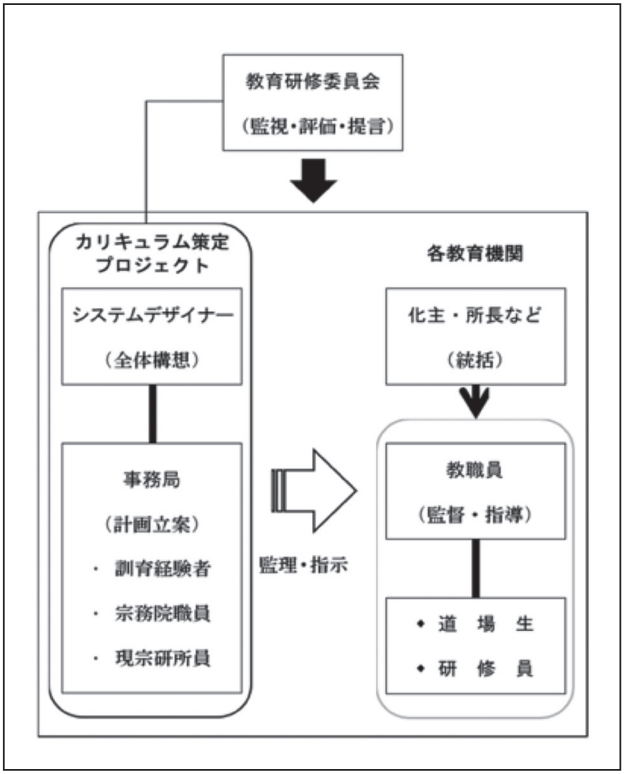


図３：教育計画策定・運営システム（仮称）

『（仮称）日蓮宗行学林』構想とは

- 奥邨正寛宗務総長(1993-1996)の諮問を受け、教務部の要請によって、現代宗教研究所が策定・答申
- 宗門における法器養成の目的
  - ① 信仰の継承者～大聖人の末弟たる自覚に立った弘教者として
  - ② 教団の構成員～祖願達成を目的とする教団の構成員として
  - ③ 道場の後継者～教化活動の拠点たる寺院教会結社の指導者として
- 教師養成の現状と問題点
  - ① 教団による一貫した生涯教育のシステムとカリキュラムを持っていない。
  - ② 指導者養成の専門機関がなく、指導体制と指導方針が確立されていない。
  - ③ 教団が主体的に教師を養成するための総合的な受け皿が欠如している。
- 総合的法器養成システム案の概略
  1. 教師生涯教育のための一貫プログラムの策定（法器の全人的な生涯教育）
  2. 教師養成のための指導体制の確立と人材の確保（総合研究機関の併設）
  3. 総合的法器養成システム設立への展望

図４：行学林（仮称）構想について

『(仮称)日蓮宗行学林』の概要(案)

■ 行学林の位置づけ
- 一貫した法器養成プログラムの中核をなす教師養成機関であり、所定の入林資格を得た教師希望者に原則として１年間の義務教育を施す。現行・信行道場を包含した行学二道を具備する総合的僧風教育カリキュラムの指導を目的とする。

■ 行学林における教育内容
- 行学林においては、その役割を十全に発動するために、修学・修行の２部門を修得の根幹とする。

■ 行学林の指導体制
- 学林生各自の信仰は1年間の学林生活において、学林長や各常勤講師・外来講師等の指導により、三宝給仕を基本とした日々の行法、学解・実習を中心とした科目の修得を通じて徐々に形成されるものであろう。また、学林指導者や学林生相互の尊敬と敬愛をもとにした交流の中で、内面的な信仰の熟成が進んでいくのである。

図５：行学林（仮称）構想の概要（案）

〈行学林（仮称）構想を受けての感想〉

『肯定的意見』

・三十年前の構想が少しでも実現の方向で動いていれば、今と変わっていたのではないか。

・多くの教師は師匠の元から離れてどこかに住みながら学んでいる。こういう機関が作られていたら、今のような問題も変わってきていたと思う。

『実施期間についての否定意見』

・構想をそのまま実現するのは難しい。

・長期間寺を空けなければならない修行機関はハードルが高い。期間を短くして回数を重ねる形にするなどの工夫が必要になるのでは。

『教育内容について』

・世間で求められるお坊さん像と宗学の中で学んできたことにズレを感じる。人として、僧侶として大事なことなど、修行の中では学べないことも学ぶ必要がある。

〈地方の現状、住職数の現実〉

ここで、現宗研研究員二名より、地方の現状並びに住職数の現状についての情報提供・報告がなされた。

東北地方の現状として、人口減少、高齢化が進むにつれ、寺院も後継者問題に悩まされている。代務も増え、経済的な問題から兼業を考える方も増えている。資質向上について検討されているが、一方で気持ちや志があっても経済的な問題、時間が取れないという問題、地理的な問題などの事情から、教師資格をとることすら難しい現状がある。

教師になるハードルを下げ、教師になってからの研修を考えていくというやり方を模索していくことで、今困っているお寺、存続が難しいお寺の現状を解決していく、という視点も必要である。（報告者：齋藤宣裕）

日本の人口の推移とここ三十年の住職数の推移から、二〇四〇年には教師の全体数は六〇〇〇人を切り、住職数は三九〇〇人を切るという予測がある。これは、現時点より代務寺が一二〇件増えることを意味するが、この二、三年の代務寺の増加スピードが「加速している」ことを踏まえると、予測よりはるかに代務寺が増えていくことも危惧される。住職を担う人材の不足に対しては、早急な対応が必要である。（報告者：髙野光拡）

〈地方の現状、人口減少のデータを踏まえた感想〉

『僧侶の質の向上や教育内容に注目する意見』

・僧侶の自覚や積極性、見るもの聞くもの触れるもの全て勉強という心構えがあれば、いくらでも研鑽を積んでいける。

・信行道場で詰め込んで一通りできるようになっても、忘れてしまうこともある。その後の研修、研鑽によって向上するという現実がある。

・僧侶一人一人が幸せ（法悦や充実感）を感じながら活動していくためにはどうしたらよいか、といった視点も大切。

『教師の裾野を広げ、教育の機会を充実させることに注目する意見』

・坊さんになりたい人、特に在家の方々が「なり方がわからない」現状がある。体験としての出家得度、「教師」の前に「准教師」を据えるなど、入り口として入りやすい形や資格を整えることで裾野を広げていけるのでは。

・期間を分割したやり方を採用することで、仕事や住職との両立を目指していけるのでは。

・教育の「中身」に一貫性がないと意味がない。「自分を見つめていく」修行や研修を盛り込んでいけたらもっと充実していくのではないか。

『指導者の育成に注目した意見』

・上から押さえつけて言うことを聞かせるやり方では感動など生まれない。指導者を指導する体制というものが大切だと思う。

『発展的な視点を示唆する意見』

・兼業の増加や寺院の統廃合は避けられないとして、昔のような中央集権的な宗門を目指すのか、いまのフランチャイズ的な宗門のままでよいのか、どうなることを目指すのか、という宗門の大きなビジョンが必要。

・イノベーションとは社会に新たな市場をつくること。社会に感動を与える、隠れたニーズを見つけていくという視点が必要になってくる。

・「教師への入り口を広げること」と「資質の向上」が矛盾しない道もあるはず、という視点で議論がなされると良いのでは。

・「信行道場の日程を短くすることで、すぐに、教師のレベルが下がるという訳ではない」という視点で議論をすべき。柔軟に、効果的な教育というものを模索していく必要がある。

〈まとめとして〉

三時間にわたる議論の中で様々な意見が交わされた。その中でも繰り返し出てきた内容や改革案について、以下、論点を整理しながら列挙したい。

『問題の背景』

変化の激しい現代において、社会のニーズをくみ取り、答えていくためにも教師の資質向上は必須である。同時に、人口減少に端を発する教師の人材不足、教師数の将来的な減少もあり、教師になるための裾野を広げる方略が求められる。「資質向上」と「裾野拡大」の両立を目指す、柔軟な発想が必要であると言える。

『現行制度について』

継続性や、実施された教育に対するチェックがないことが問題である。

ＰＤＣＡサイクルのように、現行の教育における結果を評価・分析し、次につなげていくための仕組み作りが求められる。例：「教育計画策定・運営システム（仮称）」

教師資格制度の問題。現状、信行道場を出ると「指導できる」「弟子を取れる」「住職になれる」と見なされるが、この三要素を分け、「弟子を取れる」「住職になれる」をもう一つ上の資格とし、そのために研鑽していくという仕組みを考えていくことで、「裾野は広く」、「住職のレベルは高く」なることを狙っていけるのではないか。

『研修制度ついて』

免許の更新制度のような仕組みを作ることで継続的な研鑽を促し、教師全体の質の向上を狙えるのではないか。また、「行学林（仮称）構想」は、実現すれば現状を変えていくきっかけになるだろうという意見が多く、布教院のように修行期間を分割して回数を重ねる形をとることで、時間的・地理的制約へ配慮できるのではないか。

『教育の中身（求める教師の資質）について』

「聖性」

厳しい修行、伝統的な行事、戒律の順守など、「聖」を見出す部分は、信行道場をはじめ伝統的な修行機関の活動を継続することで高めていく。

「社会性」

人に寄り添う技術、社会のニーズをキャッチするアンテナ、一般社会に必要とされている智慧や技能は、信行道場に組み込むことや、教師認証後の研修機会を充実もしくは義務化していくことで向上を求めていく。

「信仰」

法悦体験や信仰体験などは、右記の「聖性」や「社会性」を備えた活動の基礎となる。それを体験させるためにどのような教育プログラムが必要かについても模索すべきである。

「教育者自身の育成」

どのような教師を目指すのか、日蓮宗として譲れない芯は何かといったビジョンを宗門が示し、その実現にどのような体験が必要なのかを研究すると共に、教育指導者自身の育成を宗門が担っていくことが求められる。

〈付録：事前アンケート結果〉

参加予定者に対し、僧道林や信行道場、またはその後の研修機会に対する不満の有無、理想の教師像等について事前アンケートを行い、十一名からの回答を得た。

『僧道林について』

概ね「充実している」と回答。他にも必要な研修内容があると指摘された内容の中には、「随身修行」「法悦や充実感を得られる体験」が必要であるという意見も見られた。

『信行道場に至るまでの教育について』

七三％が不満と回答。「修行場ごとに指導内容が違う」「お坊さんの意識向上を目的とした訓育に力を入れるべき」といった訓育内容に関する不満と、「入場のための物理的・時間的ハードルの高さ」「兼業僧侶に対する理解や配慮の

少なさ」といった制度面に対する不満に二極化していた。

『教師になった後の研修や修行について』

六四％が不満と回答。「カウンセラーなどの資格」「寺院経営の基本、簿記、資産形成など」「僧侶としての自覚を問う研修」が必要という、研修内容の不足に関する言及と、「リモートや地方巡回、短期間など、修行の機会を充実させてほしい」「各管区での研修に中央からアプローチが欲しい」といった制度面に対する言及の二種類があった。

『教師自身が思う「理想の教師」について』

・「先祖供養、懺悔、お勤め、給仕」などの「行い」に関する理想

・「お経や御遺文の理解」などの信仰心や教学に関する理想

・「人に寄り添う、信頼される、研鑽を続ける」などの人間性に関する理想

・日蓮聖人のような姿

など

『世間の人が思う「理想の教師」について』

「お経を上げてくれる、禁欲的な生活、肉食妻帯をしない、お酒を飲まない」などの聖職者としての理想と、「寄り添える人、穏やか、誠実、言動一致」といった社会性の高さに関する理想にまとめられた。

第Ⅲ分科会

座　　長　　石原顕正
問題提起　　中井本蓉
運　　営　　小髙絢華、村上慧香、櫻井義秀、横山正見、成田東吾
記　　録　　森下恵王
参 加 者　　十七名

一、運営について

今回の中央教化研究会議は、オンライン会議システムZoomを用いた形式であるため、参加者との適切な情報の共有をどのように行うか、加えて発言機会が参加者にある程度均等に回るようになど、オンラインならではの注意をしながらの分科会運営となった。

また、今回のテーマはジェンダー問題[1]として討議するものの、女性の参加者が少ないという問題があり、意見の多様性を担保する意味でも、運営に加わっている女性の研究員も討議に加わるように配慮がなされた。

さらに、ジェンダー不平等は非常にセンシティブな問題であり、とりわけ男性の参加者が踏み込んだ発言を躊躇する心情も予想できるため、参加者の自由な発言を促すため、発言について責任を問われない空気感の演出という点にも気を遣った運営となった。

二、問題提起

現代宗教研究所では、近年の社会情勢を受け、女性教師の登用について宗務内局より諮問を受けたことから、この問題を中央教化研究会議において広く討議を進めるべく本分科会を発足した。

本分科会テーマの「宗門におけるジェンダー問題のイノベーション」とは、宗門における男女間格差問題を考える中で、日蓮宗という組織にイノベーションをもたらそうとするための試みである。

宗門におけるジェンダー問題にイノベーションを興すことは、

（一）　世界的な女性進出が進む中、組織の中における女性比率（活躍度）に世間の注目が集っていること

（二）　組織内の多様性を高めることによって、その組織が将来的に生き残る可能性を高くするため

という「社会的関心」と「組織の生存戦略」の二点において、その必要性が高まっている。

宗門における主なジェンダー問題としては、

①本宗教師のうち女性教師の割合は一割（女性教師の数が圧倒的に少ない）。

②宗会議員は全四十二議席あるにもかかわらず、現在、女性議員は一名。

③宗務内局に女性教師が入ったことがない。

④女性教師が宗務院の中間管理職に就いたことがない。

⑤女性教師が宗務所長に就任したことがない。

⑥女性教師のための布教活動や学習の場がほとんどない。

といった問題が挙げられる。

これらは個別の独立した問題ではなく、①～⑤は、共通して「責任ある役職に男性が就き、女性が支える」という

価値観が根底にあるなど、密接に関わり合っていると考えられる。

さらに、⑥「女性教師のための布教活動や学習の場がほとんどない」という問題については、令和三年度に実施された女性教師アンケート[2]の結果から実状を垣間見ることができる。

アンケートによると、「現在の教師としての立場は何ですか」という設問において「教師としては何もしていない」と答えた女性教師に対して、さらに「布教活動を始めたいと思っていますか」との設問を加えたところ、「始めてみたい」（八．〇％）、「機会があれば始めたい」（二〇％）、「暫く様子を見たい」（二一．三％）と、四九．三％は意欲的であり、「したくない」（一三．三％）、事情があってできない（三七．三％）は、働きかけがあっても布教活動を始めることには困難がある様子が表れている。

また、「布教活動を始めるにあたって、場所・機会を紹介してくれる方はいますか」という設問については、六割が、「場所・機会等を紹介してくれる人がいない」という状況であるという回答であった。

さらに、「今後参加したい講習・研修機関はありますか」という設問には、

・Zoom参加や単発のものがあれば受けたい。あまり留守にできないので。
・家族のいる女性には難しい。参加できるときには年齢制限を超えていた。
・日帰りで参加できるところがあれば行きたい。
・年齢的に不可能。

といった意見があり、既存の研修機関等のあり方が現代の女性教師のライフスタイルに合っていない現状が垣間見える。

その結果、経験不足で学ぶ機会の少ない女性教師が要職に就きにくい現状を生み出しており、その現状のまま女性教師を登用する（役職を与える）だけではイノベーションを起こすことは難しいと考えられる。

女性教師の要職への登用を一過性のものにすることなく、今後も継続して一定数の女性教師が要職に就くような流れを作っていくには、男性教師を含めた宗門全体の意識改革と学習環境の整備が必要であるため、討議を行いたい。

三、　分科会討議

①参加者のジェンダー不平等についての認識

分科会討議では、問題提起に応じて、まず、本分科会へ参加を希望した動機など、参加者が各々感じているジェンダー不平等についての認識が共有された。

・都市部の管区は、多様性を尊重する意識のある土地柄。管区では昔から女性教師が登用され、要職についている。協議員会議長は女性だった。

・所属管区では宗務所監査も女性教師。影響力のある立場に女性教師がいる。呼称は「法尼」ではなく「上人」を使っている。

・女性の社会進出のみが行うべき取り組みではないと思う。子育ての関心は女性の方が高い現状もある。社会進出以外を考えることが必要。

・この宗門で要職に就きたい女性教師の方がどれだけいるのか。

・宗門全体としては女性教師が約一割のみで、社会と乖離していると思う。女性教師は当然増えるべきだ。

・荒行堂に女性は入る事ができない。

・女性を教師扱いしない風潮は憤りを感じる。

・女性の教師が受け入れられない社会があることを感じている。

・若い世代に関しては、女性教師への扱いの違いは減ってはきている。

・ジェンダー不平等は女性だけの問題ではない。
・母親が女性教師のため。法務でも男女で異なる悩みがある。女性教師の方が問題を解決できるところが多々ある。宗門の問題は多々あるが、ジェンダー不平等は解決できる可能性があるのではと考えている。
・祖母が住職だったが、女性という理由で離れる檀家がいて悔しい思いをした。
・母が教師、祖母も教師、曾祖母も教師。娘が二人いることでもこの分科会以外の関心はなかった。
・娘が四名いて、自坊の後継問題としても関心がある。女性教師を増やすためには何が出来るか考えたい。
・娘と息子がいるが、最初に生まれたのが女児とわかると檀信徒より「次は男児を」という声があった。その声に妻が大変驚いていた記憶がある。
・日蓮宗教団は男性社会といえる。要職や各寺院も男性中心で、後継者も男性優位になる。女性が何かをしたくとも、男性のように自由にできない状況がある。
・宗門全体で後継者問題がある一方で、女性の活躍の機会がない現状がある。
・政府が輝く女性、というスローガンを出しているが、働く女性以外、子育ての女性に対しての取り組みは少ないように思う。
・女性特有の事情、家族、地域性にも左右される。個人の問題と全体の問題とがあると思う。
・宗門は男性社会だが、自坊では保育園をしていて、女性が活躍している。
・ジェンダー、女性教師の宗門での活躍は少ないので、真の平等をどう理解しているのか、関心がある。男女の性の違いを理解したうえで、優劣ではなく、それぞれに尊重し活躍できる宗門になってほしいと願っている。
・仏法の立場から考えたい。男女のラベルをはることよりも、はがしていくことが平等に近づくのではないか。
・仏教で女性はどうとらえられていたのか。法華経では男女とも成仏できる。一度その点に立ち返るべき。

・仏教からジェンダーを見直さないと、仏教者としての意義が見えなくなる。

②さらなる問題提起～問題の本質とイノベーションを検討する道筋

参加者のジェンダー不平等への認識を共有したところで、具体的に、宗門におけるジェンダー平等に向けたイノベーションを起こすために、どのように施策を検討すべきか、再度問題提起が述べられた。

すべての女性教師が要職に就くことを求めている訳ではないとしても、仮に要職に就くことを望んだ場合に、男性は選択できる状況があるが、女性には選択肢自体がないのが現状である。すべての女性が要職に就きたいわけではないとしても、選択できるような環境づくりを考えたい。

具体的に、宗門におけるジェンダー平等に向けたイノベーションを起こすために、

（1）女性教師の要職への登用＝縦のアプローチ

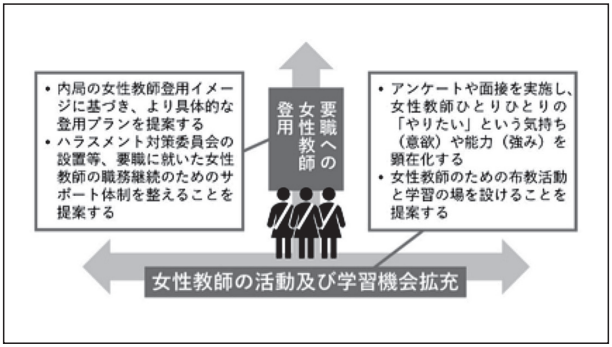
（2）女性教師の活動（学習）機会拡充＝横のアプローチ

という2つの施策を内局に提案するべく検討している。

施策を検討するために、氷山モデルから問題の本質を見極め、イノベーションを考えたい。

氷山モデルの図のように、氷山の見えている部分（制度・仕組み）ではなく、水面下で組織の基盤となっている組織風土や体質から問題を考える必要がある。

例えば光学機器メーカーのオリンパスは、組織風土の改革に取り組むため、経



営トップによるタウンミーティング（対話集会）を頻繁に行い、業績のV字回復を成し遂げた。現在も続けられているこの取り組みに見られるよう、組織風土を改革するには、組織内での対話が重要となる。

実際に、私たちが対話するべき課題は、「現状の問題点」というマイナスの要素を「理想の未来」の姿というプラスの要素に転換することでその一端が見えてくる。

例えば、女性教師のアンケート結果によれば、次のような転換ができる。

宗門におけるジェンダー不平等から、女性教師の望むあるべき未来を考えることによって、宗門の組織風土のイノベーションにつながっていくと考えられる。

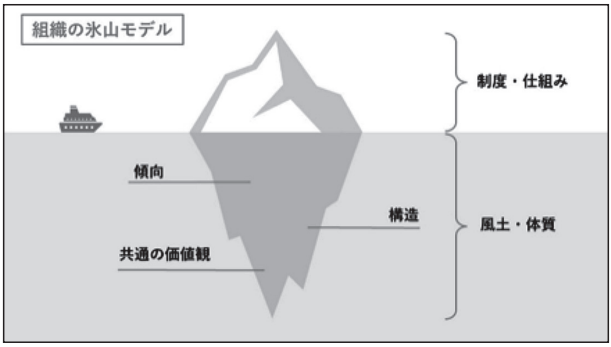
それが、今回の中央教研の全体テーマにある「日蓮宗を未来から構想する」ということではないだろうか。

③どのように「あるべき未来」へたどり着くのか

座長より、後半の問題提起に基づき、「あるべき未来」をどのように共有して、たどり着くために何をすべきかについて参加者に意見が求められた。

◎制度上の問題と組織風土の問題

・氷山モデルで、上の制度に問題があるのか、下の風土体質に問題があるのか、事実確認をしたい。伝道企画に関わっているが、「女性教師は除く」という文言があるならば、そこを改善する必要がある。議論を聞いていると、そのような文言はあまりないのではないか。



・制度に問題があるのかどうか精査すべき。
・条文に女性教師についての規程がないならば、やはり氷山の下の部分に問題の本質があると考える。
・風土体質の問題であるならば、参加者ほぼ全員、女性教師の活躍に異議を唱える人はいない。仏教、宗門の教えがあるからだと思う。女性が進出しにくい風土があるならば、教義に反していると考える。
・問題が風土体質にあるならば、宗門の理想を掲げ、女性の進出を阻むものがあるならば、宗門の要職の方がコメントを出すべきだと思う。
・男女の問題もあるが、年齢の問題、影響もあるのではないか。女に何ができるの?という意見もある。
・管区の女性教師は二十名ほど。情報交換を頻繁に行っている。男性とは異なる発想で提案してくれる。全体のイノベーションが必要といえる。
・教育も重要だと思う。本来は日蓮宗の教義が平等を説いているので、日蓮宗で女性も男性も活躍していくように学んでいくことが求められるのではないか。
・組織風土を変えるためには、女性軽視の意見が出てしまうことについて、理解啓発が必要になる。気付いて認識を変えて貰うということが必要。女性教師は様々な事情をのりきって、現状をこなしているのか、ＩＴを活用しているのかなど、工夫を聞きたい。メンターがいることが支えになる。
・地域の風土と思っていたことが日蓮宗全体の風土といえるため、目に見えるところから進めていくべきではないか。

◎要職への登用

・最初から要職登用ではなく、段階的に登用していく、事務局レベルで女性がどのくらい活躍しているのか把握したい。まずは、そういうポジションについて頂いて、経験をつんで頂きたい。

・要職登用ではなく、適材適所がなされているかが重要。
・組織（動けるところ）から動いて、地方にも周知することが大事。
・クォーター制（一定数の女性を採用し女性の割合を維持する制度）は、女性だから良いというのではなく、女性だからなれないという「ガラスの天井」を取り払う制度。要職に女性が就いたら組織がどうなっていくのかを見ていくことができる。その人の属性にかかわるものを採用の場に持ち込まない、属性による差別をなくしていくための制度。
・宗務院の職員で女性教師が一人もいないというのも現状の一端ではないか。宗報に人事が出るので皆が知る機会になる。
・師匠が女性教師、管内の声明師会々長を務めていた。祖母の時代は男性と女性の区別が明確だったので活動が難しかった。現在、女性教師は母のみ。同じ一教師として活動できているのではないか。あえて宗門の制度の中に、女性の枠をつくるなど、組織設計を見直すことが第一歩ではないか。
・宗務院で活躍する女性教師の姿が目に見えれば、影響力がある。管区から変えていくよりも、やりやすいのではないか。

◎専門の窓口の設置

・どういうサポートをしたら要職に就きやすくなるか等の検討をする機関、女性をサポートする組織窓口があるといい。男性は気軽に周囲に相談できるが、女性は機会が少ない。
・男性教師は何かをするかしないか選択する機会があるが、女性の場合は自坊の法務だけをやっていればいいとか、婿が来るまでのつなぎだとか、そういった場合も多い。どういった役職があるかも知る機会がない。
・何かしら情報にアクセスできるようになること自体が大切なのではないか。

・周りの方の様子を伺う機会など、横のネットワークが豊かになることで、縦のネットワークで情報を得る機会になる。
・性的なマイノリティ、社会的なマイノリティなど、宗務院に少数者の意見を届ける手段はあるのか。専門の窓口と担当者を置き、相談内容が参照できるようにするべきである。

◎女性教師へのサポート

・女性教師が進出していく上でどういうサポートが必要か考えていく。
・家庭と寺院とどちらも女性が関わるのは大変だ。男性教師の場合は自分のスケジュールのみで動くことが出来る。女性は自分の都合で動きにくい。
・宗門の女性教師の高齢化が進んでいる。実際には活動できない女性教師が多い現状も踏まえなければならない。
・伝道推進の企画では、託児の配慮を行った企画を実施したことがある。
・身延山久遠寺に、なんてん寮という女性寮ができた。久遠寺にとってなんてん寮はイノベーションだと思う。

◎その他

・寺院社会で女性が感じる生きづらさを考えることで、仏教教団に日蓮宗がアピールできることがあるのではないか。
・トップダウンと同じくボトムアップも大事で、横のつながりをどう作っていくのが良いか、それを検討するのが大切。
・次年度以降も中央教研においてジェンダーに関するテーマは取り上げてほしい。男性住職も高齢化が進んでおり、女性が活躍する時代が来る。お互いに支え合い、宗門全体を盛り上げていきたい。
・ＳＤＧｓでもジェンダー平等などが目標に入っていることもあり、社会の関心も高いため、社会全体に発信していきたい。

四、まとめ

以上のように、本分科会のテーマ「宗門におけるジェンダー問題のイノベーション」について検討がなされた。問題提起にて六つのジェンダー不平等が挙げられ、分科会討議においても参加者の関心の高さが表れた。

しかし、ジェンダー平等の本質を考えると、少なくとも宗制上は、日蓮宗において教師の性別により扱いが異なるような規程は見当たらない。

そうでありながら、ジェンダー不平等が起きているのであれば、その本質的な原因は、組織風土や体質などに起因する、ということが今回提示された氷山モデルにより共有され、分科会討議も組織風土やその対策に焦点が当てられていった。

今回、分科会にて討議されたジェンダー不平等への認識や取り組みの案については、取りまとめて宗務内局に提言を行うものとしたい。

しかし、ジェンダーについては、これまでも宗内で議論がなされていながら、現在もなおジェンダー不平等、またはその根幹となる組織風土が存在することは否めない。

したがって、一過性の取り組みにとどまらず、今後も、継続性をもってジェンダー平等に向けての議論や理解啓発、不平等の是正についての取り組みを続けていくことが望まれる。

1　今回はジェンダー（性別役割分業の固定化）についての議論に焦点をあて、性自認や性指向性などの話題については議論を拡大しない。

2　女性教師アンケートの結果については、令和四年度に別冊の報告書にて掲載予定。

第Ⅳ分科会

座　　長　　柴田章延
副 座 長　　及川一晋
問題提起　　水谷進良
運　　営　　福島正堯
記　　録　　松井大宗
参 加 者　　十五名

一、運営について

本分科会の運営は「宗門運動調査ＰＴ」の嘱託・研究員が中心となって行った。基調講演終了後、昼食を挟んで、嘱託・研究員が各分科会毎に部屋に分かれ、それぞれの分科会のブレイクアウトルームに入室して行った。

二、問題提起

本分科会での問題提起は水谷研究員より発題され、「宗門運動のイノベーション」について討議が行われた。現在現代宗教研究所には宗門内局より令和三年度まで続けられてきた、「立正安国・お題目結縁運動」の総括に向けての調査が求められている。開会時、田中恵紳宗務総長より本年度中央教化研究会議で寄せられた意見を、次年度以降の宗門運動を策定する際の参考にしたいとの旨もあり、本分科会では参加者に対し「立正安国・お題目結縁運動」の反省と次年度以降の宗門運動への建設的な意見を求めることとした。問題提起の要略は次の通り。

本年令和四年度は「立正安国・お題目結縁運動」が終了し、次の宗門運動に向けての準備と総括の年に設定されている。

今回の宗門運動に対する現場の声を聞いてみても、肯定的な意見があがる一方、御降誕八〇〇年事業・布教方針と混同され焦点が不明瞭であったとする意見も多かった。また播種→育成→開花→結実という四期に分けた運動は、現場で信徒・未信徒を教化する実践にそぐわず、それに照応した結果を求められるため、教化の場において枷にもなったという消極的な意見も多く見られた（令和三年度管区伝道企画会議報告書より）。

宗門運動を策定するのは宗務内局だが、それを実践するのは現場の僧侶である。今の宗門僧侶が抱える危機感は、宗門へ向けてというよりも、個々のお寺の存続に重きが置かれているように見受けられる。無論それも重要であるが、広宣流布・一天四海皆帰妙法という祖願・宗是に紐付けられる宗門運動を、教師・信徒が一体となって取り組む気運の高まりも求められるのではないか。

九年後の令和十四年に日蓮聖人七五〇遠忌を迎えるにあたり、新たな宗門運動も策定されることになる。本分科会では、私たちが行う宗門運動により良い変化をもたらすにはどうすればよいか。今回の宗門運動について、継承すべきことや改めることを議論することによって、イノベーションが起こると考える。

三、分科会討議

問題提起終了後、最初に参加者に対し、柴田座長より布教方針、宗門運動、三大会についての説明と、またそれらがどのように繋がっているかの説明がなされた。というのも、「宗門運動調査ＰＴ」において令和三年度管区伝道企画会議報告書（以降伝道企画会議報告）を精査した際、布教方針・宗門運動・三大会のそれぞれの意義とその関係性が管区レベルで浸透していなかった現状が確認された。

「宗門運動調査ＰＴ」においても宗門運動の総括に向けての調査が内局より求められた際、最初に布教方針、宗門運動、三大会のそれぞれの意義とその関係性の理解から始めた結果、各管区がそれぞれの意義を理解出来ていないだけでなく、内局より提示されるそれぞれの順序や策定組織の縦割り等の問題点が確認されたため、具体的な討議に移行する前にその説明が必要であると判断し、事前に資料を作成し、それを提示しながら説明を行った。今回の分科会では前半と後半に分けて討議項目を次のように分けた。

前半…講演と説明を聞いた上で、今回の宗門運動の振り返り
後半…今後の宗門運動への建設的な意見の提示と集約

問題提起でも示した通り、やはり今後の宗門運動の在り方を考える前に今回の宗門運動を顧みる必要があると事前に運営で確認したため、参加者には最初にこれまでの説明を聞いた上での宗門運動への率直な意見を伺った。そしてその後、それを踏まえた上で今後の宗門運動への具体的な意見を募った。

まず今回の宗門運動について参加者に率直な意見を求めた。比較的多く見受けられた意見は以下の通り。

・宗門運動の意義については理解出来るが、具体的に何をすればいいのか分からない
・僧俗一体となって推し進めるのが宗門運動であると思うが、檀信徒は理解出来ないので、実行に移せない
・宗門運動と布教方針を策定する組織の一元化を図った方がいい

「具体性に欠ける表記」

最も多く見受けられたのは、具体的に各寺院・教師は何をすればよかったのかという意見だ。宗門運動三十七項目では具体的な活動が示されている項目もあるが、曖昧な表現が多く見られたため、現場では具体性に欠ける提示に頭を悩ませたようで、伝道企画会議報告でも同様の意見が多く見受けられた。また具体的な明記がされている宗門運動でも、当該管区以外の地域では取り組みにくい項目もあったり、既存の取り組みが宗門運動と内容が合致していると考えられる場合、継続すればいいのか、活動内容を刷新すればよいのか、内局より具体的な指示を望む指摘があった。その結果、各運動項目において具体的な活動事例を示して欲しいとの意見が挙げられたため、次年度以降の宗門運動では現場の寺院・教師が活動し易いように、運動内容の詳細についての表記が必要であると考える。いずれにしろ、現場の意見をボトムアップするにはまずは宗門運動への理解が必要なため、詳細な説明と時間が必要である。

「組織間の疎通」

また今回の教研を開催するにあたり、宗門運動の策定構造を調査して、布教方針と宗門運動を策定する機関が同一ではないということが初めて分かったが、これも現場が混乱した原因ではないかという意見も多く上がった。これまでの布教方針と宗門運動の関係は次の通りである。

布教方針…祖願を理解し、これを達成するため、日蓮宗という仏教教団の全寺院・教師が日常の布教活動の根幹とするものであり、伝道企画会議にて策定される。

宗門運動…祖願達成のため、宗門全体として長期的に推し進めていくべき活動全体を指し、宗門運動本部、及び本部企画推進会議で策定される。

つまり教師や寺院が推し進めていくべき運動が宗門運動であり、その根幹が布教方針であるというのがこれまでの関係性であったが、両者を策定する機関が同一ではなく、さらに三大会、主に八〇〇年事業も同時期に行われていたことが混乱する要因になったのではないかという意見もあった。恐らく内局側に何かしらの意図があってそのような組織図を採用されているのかも知れないが、今後は組織形態についても変革を起こす必要があるのではないか。

休憩後、次年度以降の宗門運動への具体的な案について討議を行った。

・社会情勢は刻刻と変化しているので、宗門運動も短いスパンで変化した方がいい。社会情勢に応じて、宗門の問題だけでなく、社会問題も取り入れてみては
・次から次へ宗門運動を始める前に、直前の効果測定を行った方がいい。そのため具体的な数値目標を取り入れてはどうか
・各寺院で出来る小規模なものを取り入れてみては
・ボトムアップする気があるのか。全年代で策定に取り組むべき

「短いスパンの宗門運動＋ＳＤＧｓや人口減少問題」

これまでの宗門運動は中長期的目標を設定した上での運動となっていたが、参加者からは運動のスパンを短期にするべきではとの意見が上がった。理由として、寺院を取り巻く環境や社会情勢の変化が時代が進むにつれて短い周期で起こっているため、十年以上の運動ではそれに対応し兼ねるのではないかという危惧があった。そのため宗門運動のテーマは長期に掲げ、サブテーマを短いスパンで変えていくという具体案が上がった。この方法は教区や管区単位

での研修会では既に幾つか取り入れられている手法である。例として中部教区の教研では「心に寄り添う」というテーマを続けており、その内容を年度毎に「テーマパークに学ぶおもてなしの精神」や「自然災害」と変えている。つまり宗門運動においては、長期的な目標は変えずに、年度毎のテーマに応じて具体的な運動の内容を変えていくということである。無論そのような意図がこれまでの宗門運動にもあったかも知れないが、運動項目の表記に目に見えた変化が見られなかったため、教師にはそれが伝わりにくい状況であったことには変わりないといえる。

またＳＤＧｓや人口減少といった社会問題を宗門運動に取り入れてみてはどうかという意見も上がった。人口減少・人口流出を背景とした過疎化による寺院収入の減少や後継者不足等は、宗門にとっても喫緊の課題である。そのような課題を宗門運動に加えることによって、宗門全体で問題に取り組めることが出来るのではないかということである。千葉南部の例では「菩薩づくりでまちづくり」というテーマで、人口減少を止めるのではなく、狭くなったコミュニティを逆手に取って縁づくりを進める取り組みが行われている。これまでは人口減少を食い止める、教師を増やすといった政策に重きが置かれていたが、画一的な政策ばかりでなく、教区や管区の様々なアプローチをクローズアップして取り入れていく事も検討すべきである。

「小規模な運動」

また各寺院・教師でも参加出来るように、小規模な運動も取り入れるべきであるとの意見もあった。既存の宗門運動にも単一の寺院・教師でも参加出来るものはあるが、具体的な取り組み方についての例を提示する必要がある。

「具体的な数値目標を定める」

実際、宗門運動の具体的な例や目標を掲げるにあたり、その具体的な数値も表記するべきであるという意見が多か

った。というのも、次期の宗門運動を検討する際にそれまでの実際の運動内容とその効果について検証するべきである（※ＰＤＣＡ）との意見がほとんどの参加者から上がったため。総括の際に単純な成功、失敗で語るのはやはり粗雑であると言わざるを得ない。運動の目標が具体的に、また数値的に示されていれば総括の際も詳細な検証が可能な為、次期の宗門運動の策定または改善の為にも具体的な数値目標を掲げ、それを共有することが求められる。今回の参加者からは例としてＳＮＳの利用を宗門運動に取り入れ、フォロワー数を目標値の一つとする案が上がった。

※ＰＤＣＡ…経営手法の一環。Plan（計画）→Do（実行）→Check（評価）→Action（改善）のサイクルによって、事業の改善や効率化を図るもの。

「単なるボトムアップではなく、策定する本部に全年代を取り入れる」

今回の本分科会の問題提起でも述べたが、現場の教師の宗門運動に対する関心の低さが伝道企画会議報告からも伺える。今回その理由についても、分科会の討議を通して推察することが出来た。結論から言うと、現場の教師の意見を取り入れる、ボトムアップの限界とその機能不全である。

全員の意見を集約して納得する施策を策定するというのは宗門運動にかかわらず、あらゆる施策においての理想論であるといえるが、それを実現するのは容易ではないということが分科会の中で上がった。無論ボトムアップの全てを否定する訳ではないが、やはり最終的にはトップダウン形式が望ましいとの意見も上がった。

またボトムアップを掲げていても、実際それが実現出来ていないケースがあるのではないかという意見もあった。というのも、やはり教師間のジェネレーションギャップが激しく、低い年代の意見が取り入れられてないとの声が上がった。無論世代間によって理解出来ない事柄もあると思うが、自分が分からないから行わないということを止める

べき、自分の意見を理由も無く否定されるから付き合いたくないという厳しい意見も上がった。

四、まとめ

今回の第Ⅳ分科会においては宗門運動のイノベーションについて討議したが、今回の宗門運動はその内容や意義が寺院・教師に十分に伝わっていなかったことが確認された。これは運動内容の具体的表記や、数値目標の設定を求める声が意見として上がったことがその証左といえよう。宗門運動はボトムアップとトップダウンの適切なバランスの上に決定されることが望ましいのではないか。

またこれまでおこなってきた、宗門内局が現場に赴いての説明も意義あるものであるが、刻々と変化する社会情勢に対応した、「見て分かる」宗門運動の表記が求められている。